

巻頭言 「本年度の全国私立大学FD連携フォーラムの代表幹事校を担当するにあたり」 教育・学習支援センター長 望月雅光 ……1	
[GCP] 質の高い実践的な海外研修の実施を目指して ……2	
[SPACe] 2018年度春期の活動 ……3	
[WLC] 2018年度春期の活動／教員の紹介 ……4	
2018年度春期FD・SDセミナー（学士課程教育機構主催） ……5	
第4回創価大学教育フォーラム開催 ……6	
学士課程教育機構 ……7	
SPACe5周年／ニュース・トピックス ……8	

本年度の全国私立大学FD連携フォーラムの代表幹事校を担当するにあたり



教育・学習支援センター長 望月雅光

本学は、本年6月より1年間、全国私立大学FD連携フォーラム（以下、JPFFと略す）の代表幹事校を担当することになりました。JPFFは、2008年に発足した大学間の連携事業です。その目的は、大学の在学者数の規模や多様性の面で共通の課題を抱える中規模以上の私立大学が互いに持てる力を出し合い、FD分野において連携することです。本取組の開始は、2008年のFDの義務化が一つの契機になったそうです。当時は、国立大学が積極的にFDを推進する中で、私立大学のFDの推進は、全体的に遅れがちでした。このことからくる危機感がJPFF設立のモチベーションだったと関係者から伺っています。本学は、2010年度に加盟し、昨年度は、地域担当幹事校を担当しました。

現在、加盟大学数は、37校であり、加盟大学の学生数を合計すると私立大学の総学生数の約33%にもなります。JPFFのFD推進による大学改革や教育改善による高等教育への貢献は計り知れません。

このJPFFは、ちょうど本年度で10周年の節目を迎えています。代表幹事校として、これまでの実績を活用しながら、各大学の負担を軽減しつつ、事業を発展させる必要があります。運営の負担軽減策の一つとして、事務局体制の外部委託が今年中に完了します。その他にも、各大学のご意見を踏まえつつ、必要な改革の一つひとつを確実に実施することが本学の役割だと考えています。それには、加盟大学との緊密な連携と協力が不可欠であり、その調整も丁寧に行ってまいります。また、本学は、これまでに国内外の大学と連携した事業を行ってきた実績があり、そのノウハウの活用も必要だと考えています。

ここで本学のFD推進の状況を確認してみます。本学のFDの推進は、2000年に開設した教育・学習活動支援センター（CETL）が担い、文科省の特色GPの採択によりFDの推進が促進されました。その後も補助期間が途切れることなくGPが採択され続けました。2014

年度からは、大学教育再生加速プログラム（以下、AP事業という）の採択により、その事業推進にあわせてFDが推進されており、全国的にみてもFD推進の先導的な大学の一つになりました。2017年度には、教員も含む教職員を対象にしたSDも義務化され、教員向けの管理運営に関連する研修プログラムを提供する必要性が高まってきています。しかしながら、教員からすれば、FDとSDの区別が難しい側面もあります。そこで、本学ではFDとSDを一体で捉え、FDセミナーの呼称もFD・SDセミナーと変更し、より階層的かつ多面的にFDを推進することを目指しています。

一方で、本学単独で提供できるFDプログラムには、限界があります。それを補完するのがJPFFの取組だと考えています。オンデマンド型のビデオ教材は、教員の都合に合わせてFDを展開することができます。特に、本学の場合、これまでのFD研修の積み上げもできており、大学がトップダウンで推進するFDから教員一人ひとりが教育や研究上の課題、管理運営の課題を踏まえて改善に取り組む個人レベルのFDの推進が必要になっています。本学のAP事業では、全教員の参加を目指した授業設計研修を実施していますが、それも個人レベルでのFDを促進する意図があります。オンデマンド型で提供されるFDプログラムは、教員のニーズに即座に対応でき、かつ個人レベルのFDを実施する上で欠かせないものになると考えています。今後、JPFFの活用方法を検討し、本学のFDに有機的に組み入れるための仕組みを提供していく予定です。例えば、新任教員研修での活用、FDに参加できていない教員向けのFDプログラムとしての活用、グループでの動画視聴としての活用、などです。

詳細は未定ですが、来年度の6月頃にJPFFの総会を本学が中心になって開催する予定です。そこで、本学の活用事例をご報告できるように、事業を推進してまいります。

質の高い実践的な海外研修の実施を目指して

GCPコーディネーター 佐々木 諭 (看護学部教授)

グローバル・シティズンシップ・プログラム (以下GCP) は、地球益に貢献する人材の育成を目指し、受講生の問題分析力、課題解決力、コミュニケーション能力等の修得をラーニング・アウトカムに定め、グローバルに活躍する人材の資質として、多様性、個性を尊重し、差異を認め合い協働できる能力を育むことを重視しています。

GCPでは、その能力を育むための取り組みとして、1年次春期休暇に、GCPを受講する学生全員が参加する海外短期研修を実施しています。現在は、フィリピンの名門大学であるデ・ラサール大学が研修先となり、2週間の研修を行っています。本研修の特徴は、1年次秋学期に開講するプログラムゼミの演習と連動することにより、研修の学びと効果を高めることにあります。

プログラムゼミは、GCP受講科目の一つとして1年次より2年間4セメスターにわたって開講しています。秋学期に開講するプログラムゼミⅡは、文献調査力、論理的思考力、批判考察力を含むベーシックアカデミックスキルを修得することを目的とし、フィリピンの事例を用い、問題要因分析に取り組んでいます。その後続く2年次のプログラムゼミでは、制度的枠組みをもとに問題を考察する力を修得するプログラムゼミⅢ、地球的問題群をテーマに実践的な課題解決力を高めるプログラムゼミⅣがシークエンスに連動し、グローバルに活躍する基盤となる力の修得を目指しています。

プログラムゼミⅡは、事例調査として、グループ毎にフィリピン国内の課題をテーマに設定し、現状分析、仮説設定、仮説検証の手順を踏み、要因分析力を高めていきます。各グループのテーマは、政治経済、教育、文化、保健医療、環境等多岐にわたり、学部の専門分野を超えた学際的な学びができるよう工夫をしています。昨年度は、「5歳未満児死亡率の改善に寄与した要因」、「小学校の学習到達度の向上要因」等をテーマに分析を行いました。

プログラムゼミⅡの事前準備のもと、海外研修では、デ・ラサール大学の教員による各グループのテーマに関する講義の受講や担当教員による事前調査のフィードバック、フィールド調査に取り組み、研修最終日には、各グループが英語でプレゼンテーションを行います。それぞれの専門分野の理解や洞察を深め、あわせて他のグループに関するテーマの講義も受講することは、学際的な視野の広がりや汎用性のある分析力の修得にも繋がっています。何より、日本での机上の学びと現地の実情に根差した学びを架橋することにより、学生にとって多面的な視野とクリティカルな考察の重要性を

理解する機会になっています。

また、研修はプログラムゼミと連動するだけでなく、GCP英語科目、統計処理能力を高める「社会システムソリューション」の学びを実践的に活用する機会ともなり、GCP生の学びを深め、学習意欲の一層の向上にも繋がっています。

授業科目と研修の組み合わせは、海外研修の質を高めるだけに留まらず、GCP生の長期海外留学への挑戦の意欲を高めることにも寄与してきました。これまでにGCP1期生から7期生の約200名のGCP生のうち、実に7割を超える151名が交換留学、私費留学等に参加しています。

留学先も米国、英国等の英語圏への留学のみならず、中国、ロシア、フランス、スペイン、韓国等の英語圏以外の国へ留学し、英語以外の語学の修得にも挑戦しています。また、先進国への留学だけではなく、南アフリカ、ケニアなどのアフリカやインドネシア、ベトナム、ブルネイなど多様な留学先は14カ国・地域にまで及びます。

文部科学省は、大学生の海外留学を促進することを目的として「トビタテ! 留学JAPAN」を開始し、官民協働の海外留学支援制度を導入しました。有難いことに、これまで2014年以降の対象期間4年間で、GCP生20名が選考に合格し、奨学金を受給し、留学に赴きました。

2010年度に開設したグローバル・シティズンシップ・プログラムは、来年度に10年目の節目を迎えます。今後とも地球市民として世界に貢献する人材を育成できるよう、プログラムの充実に努めていきたいと考えています。



フィールドワークで講義を受けるGCP生



SPACe内にある日本語ライティングセンターでは、学生が書くことや読むことに主体的に取り組めるよう、様々な学習支援サービスを行っています。今回は、2018年度春期の活動内容をご報告します。

レポートチュータリング・レポート診断

「レポートチュータリング」は、教員あるいは院生チューターが個別に学生のレポートに関する相談にのるサービスです。1対1の対話を通して、学生自身が問題を発見し、改善できるように支援します。1セッション40分間で、申し込みはポータルからの事前予約となっています。セッションを行うブースは、SPACe日本語ライティングセンター内に3つある他、図書館1階にも開設しています。

「レポート診断」は、レポート全体の構成や日本語表現について、レポート診断書により学生自身が問題に気づけるようコメン

トで支援するサービスです。ポータルサイトから申し込み、SPACeのカウンターで結果を受け取るシステムになっています。

表1が2018年度春期の「レポートチュータリング」「レポート診断」利用者数です。

表1 2018年度春期「レポートチュータリング」「レポート診断」利用者数

	1年生	2年生	3年生	4年生	計
レポートチュータリング	342	60	25	12	439
レポート診断	44	6	5	7	62

学習セミナー

図書館主催で行われた「レポート・論文 書き方講座『キホンのキ!』(5/7-11連続開催)のアンケート結果を受けて、日本語ライティングセンター主催でさらに詳しい書き方の理論と実践を学ぶ学習セミナーを6月28、29日の両日開催しました。理論編45分、実践編45分の90分セミナーで、レポートの書き方の説明を

行った後、教員二人が部屋を廻り、個別にチュータリングを行いました。参加者からは「後半がチュータリング形式になっていて、悩んでいたレポートの問いなどについての相談ができたのでスッキリしました」等の声が寄せられました。

図書館連携プロジェクト

より良い文章を書くためには、読むことが欠かせません。SPACe日本語ライティングセンターは図書館と連携して、さまざまな読むことが楽しくなるイベントを開催しています。

4月25日(水) ビブリオバトル 主催：Soka Reading Project

5月11日(金) グループブックトーク 講師：佐藤広子准教授(学士課程教育機構)

図書館を本の森に見立て、散策しながらお薦めの一冊を探し出して紹介するという内容です。グループになり、メンバーが選んだ本のつながりを見つけ、ポスターを作って他の人たちにブックトークするという発表形式で、本を巡って対話が盛り上がりました。参加者からは「温かな雰囲気の中、自分の気になった本を紹介できてうれしかった」「他の人が選んだ本を読みたいと思った」等の声が寄せられました。

6月20日(水) 哲学カフェ 講師：伊藤貴雄教授(文学部)

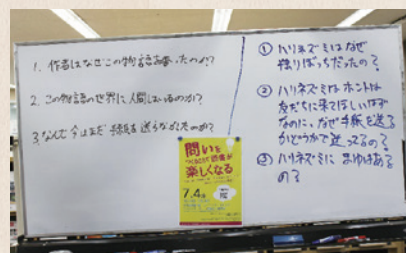
中央図書館2階のブラウジングルームでお菓子や飲み物を口にしながらカフェ形式で行う哲学対話です。取り上げたのは、ニーチェの『ツァラトゥストラはこう言った』より「読むこと書くこと」についてです。事前学習はなしで、参加者には企画当日に「読むこと書くこと」の文面を配布し、疑問に思ったことや感じたこと、関連付けたことなどを発言してもらいました。参加者からは「読みながら語りながら互いの解釈を深めていくことの魅

力に気づいた」「いろんな方の読み方に触発された」等の声が寄せられました。

7月4日(水) Question Formulation Technique (QFT)

講師：佐藤広子准教授(学士課程教育機構)

問いづくりの手法であるQFTを読書促進に応用した内容です。問いをつくるのが答えを見つけようと主体的に読む態度につながるのをねらいとしました。トーン・テレヘン著、長山さき訳『ハリネズミの願い』の第1章のテキストを、書誌情報を伏せて配布し、問いをつくり分類、書き換えをしました。参加者からは「問いづくりの習慣を身につけて読書以外の実生活でも使っていきたいと思いました。いろいろな方と意見を共有しながら楽しく問いづくりができました」等の声が寄せられました。



※図書館連携プロジェクトの今後の予定につきまして詳しくは、図書館の「全学読書運動Soka Book Wave」ホームページをご覧ください。
10月7、8日…ビブリオバトル(学内) 10月19日 ブックトーク
11月……………Active Book Dialogue ビブリオバトル(他大と交流)
12月……………アニメーション

■ WLC ランチャタイム・プロフェッショナル・ディベロップメント (PD) リポート



春学期、WLCでは3回のランチャタイムPDセッションが開催されました。第1回はケンブリッジ大学出版局のデイビッド・モーザー氏により、2年生対象のEnglish IIIおよびIVで使用されているIn Focusという教科書のオンライン教材について多様な使用法が具体的に示されました。第2回は高玉美代子助教によって、学生のコミュニケーション、コラボレーション、クリティカルシンキング、クリエイティビティの促進を目的に数週間に渡って行われた、東京

富士美術館プロジェクトの興味深い報告がなされました。今後同様のプロジェクトを行う場合、授業をどう計画し、予測される問題点をどう克服するか、高玉助教から様々な実践的提案がなされました。最終回ではジョン・シンガー非常勤講師により、大学図書館やSPACeにある数千冊のGraded Readersを使用し、学生の多読の進捗を正確に記録できるMReaderというオンラインツールの概要が紹介されました。MReaderは、単に本を読むだけでなく、語彙の習得やTOEICの勉強などにも役立つツールで、シンガー氏はクラス設定の方法、記録の仕方、学生を励ます方法など、幅広い情報を提供されました。3回のセッションはいずれも好評で、出席者からはこれらのツールやアイデアを是非クラスで活用していきたいという声が寄せられました。

■ WLC プロフェッショナル・ディベロップメント (PD) リポート

5月30日、「創価大学 人を対象とする研究倫理委員会」の審査申請手続きについてのPDセッションがWLCのリッチモンド・ストゥール教授・学事部河野大輔氏によって開かれました。教授はまず、大学の代表として教員が研究を行う際に負う法的・倫理的責任について述べられ、その後委員会が申請書を審査する際の主な検討事項や、申請書の入手先、提出についての詳細、審査のプロセスなどを説明されました。次に、申請書各事項の留意点を実際の例を挙げて詳細に解説

され、書類が却下されたり誤解されたりしないよう、特殊な用語の説明を加えられた後、教員に様々なアドバイスをされました。ストゥール教授と河野氏による今回のセッションは、研究申請書を作成し提出する際の複雑なポイントを大変わかりやすくまとめられたものでした。参加者からは、申請書記入事項の内容がよく理解できた、計画しているリサーチのアイデアを申請書に落とし込む実務的な助けになった、との意見が寄せられ、大変有意義な学びの場となりました。

■ 第13回 Global Lecture Series (昭和女子大学 治部れんげ氏)

6月20日第13回Global Lecture Series が治部れんげ氏により“Gender and Care work”と題し、「なぜ女性が家事の大半を担当するのか」という内容に焦点を当てて行われました。治部氏はまず、日本で女性が男性に比べ圧倒的に家事・育児に時間を割いていることを裏付ける統計データを示し、「これだけの男女差を当たり前だと思うか」と参加者に問いかけました。

続いて、治部氏は育児に欠かせない商品である「オムツ」のコマーシャルを2社比較し、どの様に「育児」が描写されているのか、登場人物や、彼らの乳児との関わり方に注意を向けながらディスカッションを進めました。参加者は積極的に意見を出し合い、「自分の考える普通の育児」とは何なのかを見つめ直し、講義の内容を踏まえて今後の「ケアワーク」のあるべき姿について語り合いました。その中で重要な指針となったのが、家事に対する見方の変革でした。氏は、日本人男性は頻繁に家事を「手伝う」と言うが、その表現自体に「家事は女性のものである」という潜在的な意識が見られると

指摘。しかし本来、家事は「する」ものであり、家事自体は元々「共有」するもの、して当たり前なもの。その認識ができれば家庭での家事分担もスムーズにできるのではないかと、この点を研究データを通して説明されました。

最後に、日本に根強く残る“Gender norm”をどうしたら変えていけるかという点について議論が行われました。日本の現実と今後のあるべき姿について意見を交換し、外国籍の学生は母国の取り組みを紹介するなど、学生も教員も学部・国籍の垣根を超えて様々な意見を共有しました。13回目のGlobal Lecture Seriesは、参加者が今後どのようにこの問題に取り組み、また解決に向けてどのように行動できるかを考えさせる貴重な講演となりました。



■ WLC 教員の紹介 須藤 美喜子 講師



須藤美喜子講師はテンブル大学日本校でTESOLの修士号を取得、関西学院大学、甲南大学、国際基督教大学勤務を経て2015年よりWLCに所属しています。これまで経済学部国際プログラム、日本の社会問題をテーマとしたArea Studies、WLCの英語科目、英語教員を目指す大学院生を対象としたPracticum等を担当してきました。またEnglish I & II Aレベルの責任者を務め、SEED原稿の翻訳業務にも携わっています。

研究テーマは、ディスカッションでの学生の会話を分析し、コミュニケーション能力の改善・向上を目指す事です。少人

数によるディスカッションは、教員主導型ではなく学生の主体的な学びを促進するための有効なアプローチとして広く活用されています。しかし現実には、学生たちが英語を使って活発に議論を進めるのはとても難しいことです。そこで、実際にディスカッションを行う過程で学生がどんなコミュニケーション・ストラテジーを使って意思疎通をし、どんな形で議論に参加し問題解決の道に到達したのかを分析することで、より効果的な発話促進の指導法を探っていきたくと考えています。また自律した読み手の育成を目指し、リーディングの授業でも読後にディスカッションを行い、コンセプトマップをグループで作成・発表する活動を研究しています。自ら考え発信していく力を持った学生を育てる授業を目標とし、日々奮闘中です。

2018年度春期FD・SDセミナー（創価大学学士課程教育機構主催）

第1回FD・SDセミナー



2018年5月25日（金）に、法政大学キャリアデザイン学部教授の児美川孝一郎氏を講師としてお迎えし、2018年度第1回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催しました。

「キャリア教育・支援を『大学教育の日常』に埋めもどす」

をテーマに、①学生の生育環境と発達上の課題・困難、②大学におけるキャリア教育・支援のこれまで、③キャリア教育・支援の今後に向けて、等についてご講演いただきました。

児美川氏は、進学率が増加し大衆化した大学において組織的なキャリア教育・支援が必要であるが、これまでの支援は学生の依存を強めるという逆説を生んでいると指摘され、今後は大学教育以前の課題にも取り組むことで学生の自立を促し、大学全体がキャリア教育となることの必要性を主張されました。

学内外の大学教職員33名にご参加いただき、参加者からは、「自立の仕組みを授業の中でもどのように作り出すかを考えることが必要と感じた」「授業を通して『社会、生活、知識と自身』を考えるきっかけを作り与えることが必要と感じた」等の声が寄せられました。

第2回FD・SDセミナー

2018年6月16日（土）に、久留米大学文学部教授の安永悟氏を講師としてお迎えし、2018年度第2回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催しました。

「LTD話し合い学習法の基礎と活用」をテーマに、①学び合える場づくり、②LTD話し合い学習法、③LTD基盤型授業モデル、等についてご講演いただきました。グループワークでは、「傾聴」や「ミラーリング」などの話し合いの基本が徹底され、活発な話し合いが成されました。又、LTDはアクティブラーニングの核として、さらに反転授業の元祖として位置づけられる等の説明がありました。

参加者からは、「LTDの方法論について、グループワークを通して体験的に理解することができた」「協同学習とグループ学習の違いがより明確になった」「論文やレポート作成のプロセスとしても参考になった」等の声が寄せられました。



第3回FD・SDセミナー



2018年6月22日（金）に、NPO法人CCC-TIES 附属研究所 主任研究員の堀 真寿美氏を講師としてお迎えし、2018年度第3回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開

催しました。

「電子書籍入門／CHiLO Bookの紹介」をテーマに、①対面講義とオンライン講義における学習効果の比較、②若者の特質に対応した「CHiLO Book」の機能（マイクロコンテンツ、デジタルバッジ）、③「CHiLO Book」の多様な教材としての利用（SNS、印刷物、実習との組み合わせ）等についてご講演いただきました。又、後半では、実際にノートPCを使用し、CHiLO Bookの作成手順を学びました。

参加者からは、「e-learnigと電子書籍の有用性がよくわかった」「教材のオリジナリティが表現でき、学生にとって有益で継続性のある教材を提供できる」「とても興味深いので、次回は実際に教材を作成するワークショップを是非開催して欲しい」等の声が寄せられました。

第4回創価大学教育フォーラム（第16回FDフォーラム）開催

創価大学では、2003年から大学教職員を対象としたFDフォーラムを開催して参りましたが、4年前から高大接続システム改革の趣旨に鑑み、対象を初等・中等教育関係者をはじめ学生やその保護者も含め、広く大学教育のステークホルダーに対して、大学教育が抱える今日的課題に関する理解促進を援ける目的で、教育フォーラムを開催しています。

本年度は「高大接続の視点からみたグローバル化の流れと大学教育」をテーマに、7月14日（土）本学大教室棟S201教室にて第4回創価大学教育フォーラム（第16回FDフォーラム）を開催しました。当日は、学内外より大学関係者や高等学校教員、学生ら約120名の参加がありました。なお、このフォーラムには東京都教育委員会、八王子市、大学コンソーシアム八王子、全国私立大学FD連携フォーラム、公益社団法人 学術・文化・産業ネットワーク多摩から後援をいただきました。

*** **



平田オリザ氏

フォーラムではまず、本学の馬場善久学長の挨拶の後、大阪大学COデザインセンター特任教授の平田オリザ氏による「グローバル化する社会におけるコミュニケーション」と題した基調講演が行われました。劇作家として国際的に活躍する氏の長年の経験を基に、コミュニケーションスキルのほとんどは文化に根ざしたマナーであり、文化の多様性に対する好奇心と謙虚さが重要であり、異質のものを楽しんでいける感性が大切であると述べられました。そしてコミュニケーション能力は、文化の違いに折り合いをつけ、結論を出して前進していく力であるとして、「文化の多様化によるダブルバインド（二重拘束）状態を受け入れ、乗り越えていこうとする姿勢こそ、グローバル社会に求められるコミュニケーション能力ではないか。」と結論づけられました。



大迫弘和氏

概要を述べられた後、IBの特長は国際的な視野の醸成であ

続いて、武蔵野大学教育学部の大迫弘和教授に「国際バカロレア教育が育てる地球市民」と題して講演いただきました。国際バカロレア（IB）の理念や教育内容について



り、それは人類的視野、地球規模で物事を考えることが出来て始めて身につけることが可能であると強調されました。またIBは、物事・他者の相互関連性を認識し、その中での自身の果たすべき役割を認識していくという普遍的理念を掲げる教育であり、かつそれを実践できる人間を育成するカリキュラムであるからこそ世界的にも評価される教育プログラムになっていると述べられました。

その後、「本学の取組み紹介」と題して、学校法人創価学園創価教育センターの中西 均副センター長（前関西創価高校校長）より、関西創価学園におけるスーパーグローバルハイスクール事業の取組みについて、また創価大学国際平和学研究科の小出研究科長（前GCCセンター長）より本学におけるスーパーグローバル大学創成支援事業等について紹介がありました。



シンポジウムの様子

最後に基調講演を行った平田教授・大迫教授、中西副センター長、本学の関田教授（司会）、小出研究科長、小山内国際部長によるパネル討論を行い、参加者との質疑応答を織り交ぜながら議論を深めました。参加者からは「異文化理解能力、合意形成能力はコミュニケーション能力の本当のキーワードであるということを確認しました。」「高大接続をグローバル化の流れでとらえ、何に力を入れ、新たに取り組むべき課題等が見えました。」「グローバル教育の方向性と具体的な事例の紹介をいただきました。今、求められる人材像を明確にし、そのための教育を実現させることがグローバル教育につながるものと感じました。」などの声が寄せられました。

学士課程教育機構

◆学士課程教育機構では、様々な学術団体主催のセミナーや研修会を共催する形で学内開催し、本学教職員の職能向上を支援しています。今夏、2つの団体と共催して講演会・学習会を開催しました。

第4回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催

2018年8月28日（火）、中央教育棟ディスカバリーホールにて、本年度第4回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催しました。これは、日本リメディアル教育学会の第14回全国大会・総会が8月27日～29日に本学で開催されるのにあわせ、二日目の基調講演と特別講演を本学の「FD・SDセミナー」として開催させていただいたものです。基調講演には国立情報研究所の新井紀子教授を招き、

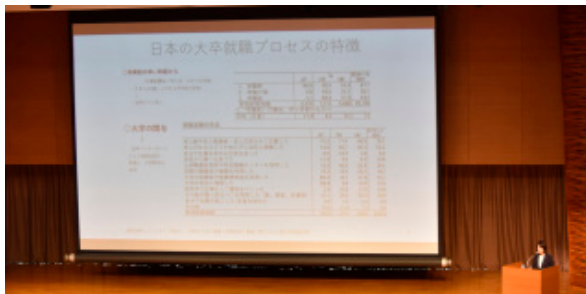


国立情報学研究所 新井紀子 教授

「AIに置き換えられない人材を育成するためには」と題する刺激的な講演をしていただきました。あたりまえですがマニュアルが正しく読めない大学生を企業は採用しません。ところが、それなりの有名大学に合格できる学生の中にも正しく理解できない学生が増えていると新井教授は指摘します。ましてや、自分が正しく読めていないこと自体を自覚しない学生をどうするか、リメディアル教育の課題であろうと問題提起がなされました。

参加者からは「AIに負けずに働くには『読む力』の育成が大切であることを学びました」「日本の中高生の読解力が深刻な状況であることがわかりました」等の声が寄せられました。

続いて、労働政策研究・研修機構主任研究員の堀有喜衣氏による特別講演がありました。「大学から職業への移行における課題」について様々なデータを示しての話題提供があり、卒業後の就業を見据えてキャリア教育を考える際、リメディアル教育に期待される役割についての新たな視点が共有されました。



労働政策研究・研修機構 堀有喜衣 主任研究員

初年次教育実践交流会を開催



初年次教育学会地域活動活性化委員会の安永委員長による講評

8月29日（水）14:00～17:00、中央教育棟AW401教室にて日本初年次教育学会が主催する初年次教育実践交流会を本学学士課程教育機構の共催で開催しました。「新入生の文章表現・ライティング指導の課題と工夫」をテーマに、学内外から60名を超える参加者がありました。本学の佐藤広子准教授の実践報告（学術文章作法とライティングセンターの協働について）を含め3つの実践報告と、それを受けての活発な質疑応答が行われました。



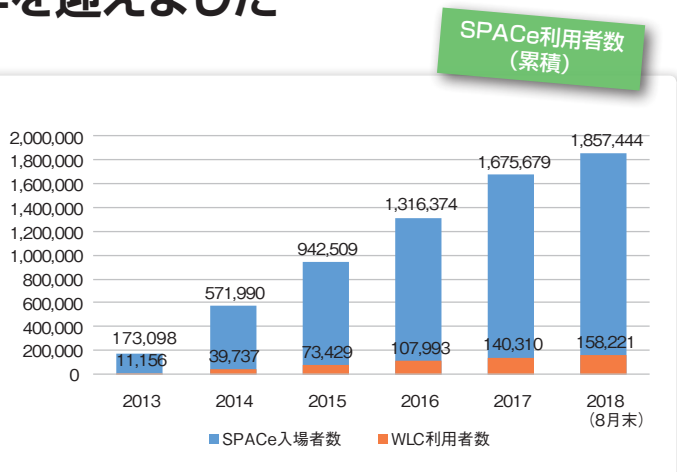
SPACeが開所5周年を迎えました

創価大学最大のラーニングcommons SPACeは2013年9月、中央教育棟竣工と共に開設されました。正式名称は Student Performance Acceleration Center。このcommonsには総合学習支援センターとワールドランゲージセンター（WLC）が併設されています。両センターの利用者も含めSPACe入場者数は間もなく延200万人を超えます。

中央教育棟西棟2階に位置するSPACe。フロア面積1,800㎡、セミナールーム、ビューイングルーム、チュータリングルームなど個別・少人数の学習に対応する部屋が9つ、完全静粛の自習エリア（C-zone）、プレゼンテーション用のアリーナ、グループ活動用のサークルブース、など多様な設備・空間が広がっています。また隣接するPC教室では、46台のPCが自由に使えます。こうした物理的環境に加え、



SPACeが提供する学習支援サービスも年間40万という多くの利用者を数える一因となっています。これは学期中、全学生数の



約3割が毎日利用している勘定です。

SPACeには大別すると、WLCのチットチャットクラブやグローバルビレッジなど語学学習に関する施設・サービスと、総合学習支援センターが提供する窓口学習相談・レポートチュータリングなど、学習スキル向上のためのサービスがあります。5周年の佳節を迎え、益々のサービス充実に努めて参ります。

利用学生の声

- ・私は3年次の留学を目標に、経済学部の特設プログラムを受講しました。語学力の向上を目指し、ワールドランゲージセンターを積極的に活用し、目標である留学を勝ち取ることができました。
- ・大学入学時から頻りにSPACeを利用して頂いています。教材やパソコン、プログラムが充実しており、学友とともに議論を交わしながら楽しく学べる環境を作っていただきありがとうございます。

2018年度秋期学士課程教育機構FD・SDセミナー

回数	開催日	講師	演題
第5回	10月12日(金)	玉田玉秀斎氏(講談師)	プレゼン力を高める講談の技術力
第6回	11月9日(金)	各学部のCETLセンター員	特色ある授業実践から学ぶ1
第7回	11月30日(金)	各学部のCETLセンター員	特色ある授業実践から学ぶ2
第8回	12月14日(金)	各学部のCETLセンター員	特色ある授業実践から学ぶ3
第9回	2月23日(土)	AP事業成果報告会	

ユネスコスクール支援プロジェクト開始記念講演会

「大学によるESDとユネスコスクール支援」

講師：鈴木克徳ESD活動支援センター副センター長

日時：11月23日(金) 15時～17時

会場：AB103教室

学士課程教育機構 新任教職員紹介

教員

学士課程教育機構 助教…仲井間静香 福 博充
WLC 講師…黄 憶文(ウォン・イボン)

職員

総合学習支援オフィス 学習支援課 正木正城
総合学習支援オフィス 学習支援課 森 幸恵



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第16号
発行日 2018年10月31日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
<http://www.soka.ac.jp/seed/>